

スポーツ指導者資格の活用に関する研究～公認水泳指導員を対象に～

○馬場宏輝(国際武道大学)

公認スポーツ指導者研究として、日本体育協会は 2008 年に実施した「公認スポーツ指導者の実態調査」を発表している。そこで、公認スポーツ指導者の活動は競技種目や資格によってどのような違いがあるのか、特定競技種目の有資格者にはどのような特徴があるのかを明らかにするために、千葉県内の公認水泳指導員（約 400 名）を対象にアンケート調査を行った。有資格者の 61 %が女性で、50 代と 60 代で全体の 48 %を占めていた。職業では主婦が 37 %と最も多く、主婦の中では 60 代が最も多かった。活動状況として直接的な指導をしている指導者が 49 %で 15 年以上活動している指導者が 40 %であったが、現在の活動としては、指導していない指導者が 40 %で、「仕事・家事が忙しい、機会が見つからない」という理由が上位を占めた。資格が役立つ点としては、「指導機会を与えられる、指導に自信が持てるようになる」と先行研究と同様の結果が得られた。

状況判断の習熟課題—実践者にとっての「状況」の検討から—

○村澤知晃（千葉大学大学院）

本発表の目的は以下の通りである。1) スポーツの実践場面における「状況」を実践者の視点から捉え直し、実践者にとっての「状況」とは何かを明らかにすること。それによって、2) 状況判断の習熟に関わる研究課題を明確にすること、の 2 点である。

このことを明らかにするために、本発表では、「状況」を構成する①身体環境、②他者、③ゲームの文脈の 3 点と実践者との関係についての検討から、さらに、実践者とゲーム全体の「状況」との関係について考察を行った。これにより、「状況」は実践者それぞれにとって個別かつ相互的なものであり、他者やゲームの文脈を含めたゲーム全体の状況と複合的な「かかわり」構造をしていることが明らかとなった。また、状況判断の習熟においては、知識・理解による限界が示された。

以上により、適確な状況判断のための実践的な「知」を実践者がどのように獲得していくのかという点が状況判断の習熟に関わる研究課題として示した。